

第2回 香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会（議事録要旨）

開催日時：平成28年11月24日（木）13:30～15:35

開催場所：香南市役所本庁舎3階第4会議室

委員名簿：受田 浩之（委員長）、竹内 淳（欠席）、北代 正彦（欠席）、北村 侑（欠席）、中内 寛（欠席）、松山 好（欠席）、宮崎 利博、高橋 丈夫（欠席）、中澤 麻友、小松 健一、水谷 輝秋、國松 美紀、亀井 秀彦、塩次 加奈子、野中 明和（副委員長）

○質疑意見等

事務局：資料1について説明

委員長：前回、『単年度評価で数字を見てもよくわからない』ということで、5年にわたっての評価も含めて当該年度の位置づけが明確になるように工夫をしていただいた。その結果わかりやすくなりすぎて目標が達成されすぎている。今後、上方修正が必要になってくる部分も見てとれる。

事務局：資料2について説明

委員長：移住に関して、参考資料として『香南住む〜ず』という冊子が具体的な事例に基づいて作成されているが、香南市にお住まいの委員の皆様からこの冊子をどういう風に評価されているか感想等お聞かせ願いたい。（担当課に対して）評判はどうか。

事務局：千部作成したが、早くも400部ほどなくなっている。内容的には自分たちも「よくできている」と感じている。

委員長：どれくらい効果を発揮しているか、については後ほど数字もでてくるので進捗ということで説明していただこうと思っている。このようなツールを通じてどれくらいアクセスがあるのか、関心を持ってもらえているのか、アウトプットをしっかりとモニタリングしておかなければいけない。冊子の中にQRコードがはいっているので、アクセス数については簡単にモニターできるのではないかと。『香南住む〜ず』がどういう反響を呼んでいるかアクセスの状況をどういう風につかんでいるか説明していただきたい。

事務局：『香南住む〜ず』ができたのが10月末で、『香南住む〜ず』を基にHPの開設を考えている。

現在HPの作成をおこなっているが、開設は来年になると思われる。HPのアクセス数についてはHPが完成すればカウントも可能なので、そういった数字も参考にしたい。

委員長：『香南住む〜ず』を作成したところから、ターゲットにどうつながっているかという情報をしっかり把握しながらフィードバックしていくようにしていけばいいのではないかとと思う。

委員：今回資料をいただいて初めてこの冊子（香南住む〜ず）があることを知った。内容もとても分かりやすく、香南市の紹介もあり、いい冊子だと思う。また、移住者の例があることもすごくいいと思う。ケーブルテレビを活用していただき一緒にいろいろとPRできればと思う。資料2の中の空き家・『まかせて会員』等についても、ケーブルテレビのPRコーナーがあるので、もっと活用していただいて住民の方や、それ以外の方にも知っていただけたらと思う。

事務局：一番苦慮していることが、空き家はあるがなかなか貸していただけないという状況である。持ち主も「いずれ誰かが帰ってくるかもしれない」と思っており、なかなか貸していただけない。ケーブルテレビとタイアップし、そういった点についても香南市内に向けてPRしていきたいと考えてい

る。

委員長：空き家対策についてはどこの自治体でも課題として一番ネックになっている。よくあるパターンとして「このまま手放してしまうと（家族など）誰かが使うことになったときに後悔する。」という話が多い。最近 JTI（移住・住みかえ支援機構）や JTI とタイアップした銀行が空き家を貸すということを、スムーズにすすめられる仕組みができてきている。その形であれば永遠に手放すのではなく賃貸で貸し、賃貸保障を入居していない時でもする。これがインセンティブ（空き家の持ち主に「貸そう」と思わせる誘因）になっているという話がある。その空き家に移住する方に入居していただくことにより移住を促進することにつながる。空き家対策については、金融機関や JTI のようなところがさらに自治体と連携することによって進むことが有りうると思う。

委員：相続が発生した時に金融機関が考える問題として、空き家が祖父・曾祖父の代の名義になっており、それをどうにかしようとするとな国各地何十人と判をもらわないといけない状況で、そのままになっている。その点を解消するには法を変えるか、規制緩和が必要。

委員：香南市の建物だけでなく土地（山林・農地）の現状について、地方都市の経済構造の矛盾点のあらわれのように思う。その土地を使う人を呼び込まなければ、いくら相続の手続きの問題を解消しても難しい。住む人・使う人・働く人を整えていくことによって、建物・土地が活かされてくる。

委員長：国をあげてなんとかしていかないといけない。そのときにもう一つ大事なものは、一箇所一箇所の建物・土地を見て、所有者・登記の話をしていき、「ここは無理だ」となるのではなく、香南市においてそういう物件がどれくらいあるのかをマクロでつかんでいき、仮にそのマクロの課題解消が実現するとこれだけの有効利用の物があるという考え方から移住のポテンシャル・空き家の可能性はこれくらいと見積もれると思う。どうしても『今ある空き家』として見てしまうので、それが「使える」「使えない」かの話だけで先に進みにくい。一軒一軒の物件に関する状況の精査になるので、費用と人手はかかると思うが、それを徹底的に、総合戦略の中で交付金をもらってやっていくのも一つのやり方だと思う。

事務局：（空き家について）中山間地域については、まちづくり協議会とタイアップして調べている。ただ、空き家というのは2年くらいほったらかしにすると、動物が住み着いたり、屋根が落ちたりして使い物にならない状況になる。早いうちに貸していただけるようにしていかないといけない。一ヶ月に一回は風通しをしないと劣化が早くなる。そういったことも含めて、さらにもう一回調査をかけていきたいと考えている。

委員：移住してくる方は初期費用がかかるので、空き家を探している方は多いと思う。移住関係のことに関わっているが、空き家に住み始めた方でも、虫が多い・隙間風が寒い等、「想像と違った。」「こんな生活じゃないと思った。」と田舎が嫌になって帰っていく方も多い。移住してきたものの3～5年で田舎が嫌になり帰ってしまっは意味がない。それなりに整備された空き家に迎え入れてあげないと結果として定住にいたらない。

委員長：移住に関する定着率が議論されることがよくあり、ある統計では移住してきた方が3年間でまた別の地域に再移住するというパターンが3分の2ぐらい、逆に言えば平均の3年間の定着率が3分の1しかない。定着率が3分の2の地域は「定着率が高い」といわれる。塩次委員が発言されたように再移住の理由についてはいろいろあって、おそらく「自分自身の抱いていた期待とは違ってい

た。」というのが物理的・精神的にもいろんな意味であると思うが、そこをまずは解消していかないといけない。一つの議論としては、移住者の期待に沿えるような環境を香南市が用意するのか、もう一方で移住してくる方が自分の好みに応じてリフォームしていく、あるいはリノベーションしていくというのも一つの移住の醍醐味であり、楽しみでもある。という考え方もある。再移住してしまふ方々がどういう理由に基づいているのかも含めてフォローしていかないといけない。

委員：この冊子（香南住む〜ず）を見るに、ターゲット層がわりと若い方のように思う。若い方は手持ちのお金が少ないので、できあがっている古民家等を探して、なるべくリフォームに費用をかけずにという方が多いのが現状であると思う。

委員長：移住者に失望させないためにお試しの移住も含めて、より受け入れ側の情報をリアルに流す。こういう冊子（香南住む〜ず）、HP やケーブルテレビさんの映像データ等を活用し、期待を裏切らないようにしっかりマッチングをはかっていくことが求められている。

委員：香南市は1,200人くらい転入してくるが、最近1,500人くらい転出してしまっている。都市機能から言っておそらくその半分くらいが都市構造の中で起こる転入転出の変化であって、500~600人の方々は、何らかの目的で、新しい住宅団地・職場に来ている。そういう意味では田舎暮らしを求めてくるものと、四国・高知県の構造として、割合働きやすい、働く場の近くが必要な新しい若者たちが来やすい場所である。魅力による定住とともに、都市の活動を支えてきた若い世代（I・Uターン含む）の需要も香南市は多いというのは忘れてはいけない。

委員長：子育て世代のファミリーサポートセンターの話があったが、子育て環境をいかに充実させ、自然が多い恵まれた環境で育てたいというニーズに対して、どう応えていくかという意味では非常に重要である。香南市のファミリーサポートセンターというのは、高知市・佐川町に次ぐ3箇所目であり、県内では先に進んでいる。

委員：（子育て支援について）『まかせて会員』がまだ少ないという話を聞いた。私の母も興味をもっているが、預かるのが自宅でないといけないという点がネックで、母の周りでもそういう方がいると聞いた。せっかく良い取り組みなのにもったいないと感じる。自宅で預かることに抵抗を感じる方は多い。預かる場所があつてそこで、ということであればやりたいという方は多い。

事務局：資料にもあるようにお子さんの預かりは基本的に「まかせて会員」宅で行うことになっている。前回の人生支援計画の中でもそういう議論があつたと聞いている。

委員：ファミリーサポートセンターの事業そのものが「地域での子育て支援」という考え方なので、『まかせて会員』の自宅で預かるというのが基本である。他に預かる場所を用意するというのも一つの手段だと私も考えたが、まだ始まったばかりなので、どうなのかというところである。ただ、『まかせて会員』の方も「他人のお子さんを預かる」という心配もあるということも聞いている。今後は会員や会員でない方含めて集まって、お互いの顔が見えるイベントを開催し、信頼関係を築くお付き合いの場が大切である。また、それぞれの地域にある子育て支援センターの方に今はどういう市民の方が利用されているのか。というのを見させていただいて、そういった方も招待しようかなと考えている。預ける側も預かる側も顔が見える関係を作らないと難しい。興味をもってもらい、参加してもらうことが出発点かなと思う。

委員長：ネックになっている部分はきめ細かく対応していくということで、環境に合った見直しも必要と思

われる。

委員：子供を預ける側も預かる側も心配している部分があるので、うまく支援していきたい。

委員：資料2について、子育て・婚活・移住の話もそうだが、取り組みは始まったばかりで将来に期待が持てるが、それを数値的にどう評価していくかということで（資料1の13ページの一番上の表）移住・定住の人口の社会増減について、社会増の年度ごとの目標数値はどこからでてきたのか。26年度は社会減であって、27年度は83人増になり、5年後の目標は社会増120人以上となっている。

事務局：年間120人の社会増を今後5年後に目指す、それと出生率で人口3万人を目指すというのが人口ビジョンの原則である。その中で、移住が何組という数字も大まかな数字として議論してもらおう。人口推計で5年後120人増だったもので、年度ごとの数値を割り振っていくと各年度の目標値になる。

委員：評価としてAになっているが、5年後の展望は一定あるとして、今年の評価はかなり厳しい。このあたりをどうするのか考えないと、2060年に3万人という人口維持ができていかないのではないのか。いろんな施策はあるとして、全体像としてどうなっているのかという議論をこういう場でもしないといけないし、庁内でもしてほしい。

委員長：社会増減の数値は目立っていて、目標値83人に対して達成は2人なのに評価はAという評価ができてきていることに違和感がある。31年度目標値の120人以上増を目指すうえでまだ2人というのは、いろんな意味で工夫が必要である、ということを数字が物語っている。どういうふうに具体的に改善に結び付けていくか。

委員：人口目標を掲げ達成に向けて、そもそも自然減であるのにどうやって人を連れてくるか、という大きな課題が残っている。これからも一つ一つ細かいことから大きな施策を含めて進めていきたいと思っている。現在のところ始まったばかりのことで、ここで今後どうやってKPIをあげていくか考えていきたい。数字については、今は指標として不十分であるかもしれないが、どうやって実現するかということに力を貸していただきたい。

委員長：最終的に5年後にKPIの達成を行うとして、下方修正と聞くと消極的な感じがするが、じっくりやるという目標を立てていっても悪くはない。

事務局：人口ビジョンの推計から言えば5年後120人以上という数字がポイントとしてあるので、来年が数値目標の数値でなければいけないことはない。

委員：目標と達成の差を縮めるというのも一つの努力目標と思う。こういう数字であるという前提で地道に取り組むしかない。

委員：A評価といいながらも目標達成率は2%である。今まで考えてきた施策の効果がこういう数字になっているという見方をしていただいて、さらなる工夫なり、新たな部分が必要になるのではないかと考えておかなければいけない。

委員長：ゼロから始まるものではないので、最悪はマイナスもあるので、そこを持ちこたえているという見方もしないとけない。

事務局：資料3について説明

委員長：いろんな意味で着実に進んでいると思うが、問題は人口ビジョンときちんと結びついていくか。

委員：資料3-8 子育て施策の充実について、「平成29年度の地域子育て支援センター統合に向け」となっているが、『香南住むへず』の22ページでは「市内5ヶ所の地域子育て支援センターでは」となっている。関係性はどうなっているのか。統合するのか。

事務局：旧山南公民館を改修して支援センターとする計画を進めている。

(詳細についてこども課に確認)

事務局：統合という言葉が「一箇所になる」というイメージが浮かぶので修正する。実情としては、現在市内に5ヶ所の子育て支援センターがあり、現在の山南の公民館を改修し、総合の子育て支援センターとして整備する。その結果、香我美おれんじ保育所の子育て支援センターはなくなる。他の4ヶ所については今のまま残すが、開設曜日については再度調整をする。香我美の総合支援センターは平日は毎日開設する。というのが現在のこども課の考えである。

委員：資料3-6の観光について、物部川流域DMOの話に関連して右の課題と今後の取り組みの中に、SNSを利用してこれを発信すれば効果があがると思うが、そういう取り組みはないのか。例えば、ミスユニバースが開催されて、参加している人がSNSで発信したところ元々の国にも効果があったという記事も見る。著名な人に来てもらい発信してもらう仕掛けをつくるなどはないか。

委員長：発信力をどうあげていくかというところで、観光旅行会社とのタイアップ・セールスキャラバン等参加の話はあるが、もう少しいろんな手段を活用していくことによって観光地としての魅力をあげていこうという提案だと思われる。いかがか。

事務局：SNSの力は大きいと思う。今後は、物部川流域3市での観光振興については、プロジェクト事業(さかなくんとくわん)としてのイベントもあるのでそういった際には、SNSを活用して情報発信していければと考える。

委員長：インバウンドに関してはSNSであったり、YouTubeであったりが非常に効果大きいと思われる。こんなに空港に近いエリアは県内でもないので、航空機利用の方々に対する訴求力をどうやって強めていくか。大型クルーズ船の話もあるが、狙い目ではあるかもしれない。

委員：最近夜須にある可動橋が車のCMで紹介され、有名な俳優が来たということで、観光バスもきている。やはり芸能人が来たというのは話題になっていると思う。そういう場所と他の観光資源を連携させてツアーもできるのではないかと思う。また、月見山こどもの森について最近アスレチックが新しくなってきれいになっているが、あまり知られていない。私自身もSNSで知ったがもったいないように思う。先日山北で「山北お花とみかんマルシェ」が開催されたが、想像以上の人が県内外から来ていた。割と宣伝されていたが、そういうイベントも兼ねて、月見山アスレチックとマルシェのような商業的なものを連携させてやると観光の目玉になるのではないか。

事務局：一つ一つの施設でおこなうと点になるので、つながるようにと香南市内の観光施設の連絡会を定期的におこなっており、ある施設がイベントをしている時に合わせてイベントをしようかということなどを月に1回程度会議をおこなっている。

委員：香南市独自の取り組みと考えたときに三宝山の城の活用に期待をしている。友人も帰省したときには三宝山からの景色を必ず見に行くので、自慢できる場所だと思う。

委員長：三宝山に関しては現在耐震診断結果を待っているとのことだが、その後については耐震の結果次第ということか。

事務局：現在、運営に賛同いただける企業を独自であたっているところである。あわせて持ち主である高知新聞社から無償貸与という形で何年間か貸してもらい、企業に勧めていきたい。という考え方で進めているところである。企業がどうしてもいなければ公開で企業を募集するという形で来年度あたりにはかなり進めていきたいと考えている。

委員長：観光要素としても、香南市の市民の方にとっても憩いの場所であることから三宝山の活用についてはいろんな議論がされているが、その後はどうなっているか。

事務局：まず企業を探して、それで基本計画に進んでいきたい。基本構想はできているので次は基本計画、実施計画と進んでいく。基本計画に進むには、企業の意向を含んだ上で進んでいかないとけない。企業とタイアップしてやっていきたい。

委員長：シャトー三宝だけでなく、三宝山全体で見えていくと県立の施設もあれば、民間所有者の話もある。トータルで議論していかないとけないのではないかと思う。そのトータルの議論をどういう形でされるのか重要だと思う。耐震診断の結果次第ではいろいろと見直さないとけない点がでてくると思う。

事務局：次回委員会は、2月17日を予定しています。後日改めてご案内差し上げますのでよろしく願いいたします。